「日々の理科」（第 2844 号） 2022,-5,20

「寄り道（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

朝の登校時の通学路の一角の「事件」には、どんどん子どもたちが増えていった。そもそも小学生は、何が起きているかわからなくても、人だかりに集まってくるものである。

やはりミミズにたくさんのアリが群がっていた。前の日が雨で、アスファルトの路面に出てきたミミズが、そのまま帰路を失い、動けなくなってしまったのだろう。アリは、強靭なあごの力で、自分よりも大きな獲物も運べるが、群がっていたのは体長 2～3mm の小さなアリだ。私はアリには詳しくないが、大きさ、色、行動から判断すると、「トビイロシワアリ」のようだ。これは、公園などにごく普通にいる小型のアリで、肉食である。ミミズに集団で群がって、小片にして巣に持ち帰る行動がよく見られる。

「近くに巣があるはずだ」と、アリの行列をだどって、男の子が巣の場所を突き止めた。

アスファルトと路側帯のコンクリートの隙間に巣を作っている。もっと良い場所がたくさん「アリ」そうだが、あえて、こういう場所を選んでいるようだ。出入口が強靭で、壊れにくいからだろうか？

数分間の「自然観察」が終わって、子どもたちは小学校に向かっていった。きっとこういう「寄り道」が毎日のように繰り返されているのだろう。